



走れメロス



語り手の位置

視点の移動

一年生では、『桜蝶』で「視点」、『オツベルと象』で「語り手」について学びました。ここでは、語り手の立っている位置、すなわち語り手の視点について考えてみましょう。

これまでに、語り手が「私は」「僕は」と語ったり、「少年は」「彼は」「ヒロ子さん」は」として語ったりする作品を読んできました。語り手が登場人物から距離をとって語ることもあれば、登場人物に寄り添って語ることもあります。『桜蝶』で学んだように、同じできごとでも語り方によって違った印象を与えます。

語り手の視点は、必ずしも固定しているとはかぎりません。同じ作品でも、語り手の視点が変わることもあります。語り手の視点の移動は、読者を作品の中に引き込む重要なしかけともなります。語り手がどの位置に立ってできごとや登場人物を語るのかに注目することは、文学作品を読み深めるうえで重要なことです。

目標

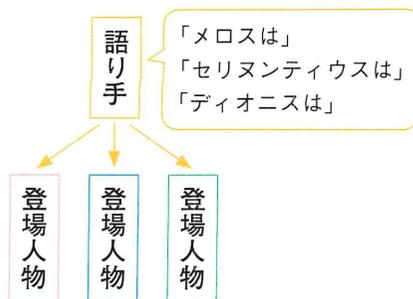
- 抽象的な概念を表す語句の量を増やし、自分の表現に役立てる。
- 登場人物や語り手のものの見方や考え方について理解し、自分の考えを深める。

象徴／タオル
時間と構成／夏の葬列
語り手の位置

語り手が登場人物に寄り添って語る場合



語り手が登場人物から距離をとって語る場合



語り手の位置が変化する効果

それでは、『走れメロス』を語り手の位置に注意しながら読んでみましょう。この作品は、次の一文から始まります。

メロスは激怒した。

ここでは、語り手が、メロスが激怒した様子を一つのできごととして眺め、メロスの外側に立って語っています。

しかし、次の場面ではどうでしょう。

私は、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。

メロスがづらい気持ちでふるさとをあとにするこの場面では、語り手はメロスに寄り添って心の中に入り込み、メロスの気持ちを直接語っています。

このことから、語り手は、作品の中で位置を変化させながら語っていることがわかります。

『走れメロス』では、語り手がメロスに寄り添ったり、距離をとったりすることに伴って、読者とメロスの距離にも変化が生じてきます。このような語りの工夫によって物語は迫力を増し、メロスへの共感を促すと同時に、読者にも強い印象を与えています。

15

10

5



ヒント

●メロスはどのような人物として語られているか、まとめてみよう。

●ディオニスやセリヌンティウスから見た、メロス像を考えてみよう。

↓ P 267



みちしるべ

2 5



走れメロス

太宰治 だざい おさむ

メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐じやちぼうぎやくの王を除かなければならぬと決意した。メロスには政治がわからぬ。メロスは、村の牧人である。笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。けれども邪悪じあくに対しては、人一びんかん倍に敏感であった。今日未明メロスは村を出発し、野を越え山越え、十里離れたこのシラクスの町にやってきた。メロスには父も、母もない。女房にようぼうもない。十六の、内気な妹と二人暮らしだ。この妹は、村のある律儀りちぎな一牧人を、近々、花婿はなむことして迎えることになっていた。結婚式も間近なのである。メロスは、それゆえ、花嫁の衣装いしょうやら祝宴しゅくえんのごちそうやらを買いに、はるばるの町にやってきたのだ。まず、その品々を買い集め、それから都の大路をぶらぶら歩いた。メロスには竹馬の友があった。セリヌンティウスである。今はこのシラクスの町で、石工いしくをしている。その友を、これから訪ねてみるつもりなのだ。久しく会わなかったのだから、訪ねていくのが楽しみである。歩いているうちにメロスは、町の様子を怪しく思った。ひっそりしている。もうすでに日も落ちて、町の暗いのはあたりまえだが、け

10

5

▼ 邪

▼ 敏

▼ 十里

一里は、約三・九三キロメートル。

▼ シラクス

シラクサまたはシラクサーともいう。イタリアのシチリア島南東海岸にある都市。

▼ 婿

▼ 宴

れども、なんだか、夜のせいばかりではなく、町全体が、やけに寂しい。のんきなメロスも、だんだん不安になってきた。道で会った若い衆をつかまえて、何かあったのか、二年前にこの町に来た時は、夜でも皆が歌を歌って、町はにぎやかであったはずだが、と質問した。若い衆は、首を振って答えなかった。しばらく歩いて老翁ろうやうに会い、今度はもつと、語勢を強くして質問した。老翁は答えなかった。メロスは両手で老翁の体を揺すぶって質問を重ねた。老翁は、辺りをはばかりる低声こしえで、わずか答えた。

「王様は、人を殺します。」

「なぜ殺すのだ。」

「悪心を抱いている、というのですが、誰もそんな、悪心をもってはおりませぬ。」

「たくさんの人を殺したのか。」

「はい、初めは王様の妹婿様を。それから、ご自身のお世継ぎを。それから、妹様を。それから、妹様のお子様を。それから、皇后様を。それから、賢臣のアレキス様を。」

「驚いた。国王は乱心か。」

「いいえ、乱心ではございませぬ。人を、信ずることができぬ、と言うのです。この頃は、臣下の心をも、お疑いになり、少しくはでな暮らしをしている者には、人質一人ずつ差し出すことを命じております。ご命令を拒こほめば十字架にかけられて、殺されます。今日は、六人殺されました。」

聞いて、メロスは激怒した。「あきれた王だ。生かしておけぬ。」

メロスは、単純な男であった。買い物、背負ったままで、のそのそ王城に入っていった。

(250ページ)

意 激怒

対 敏感

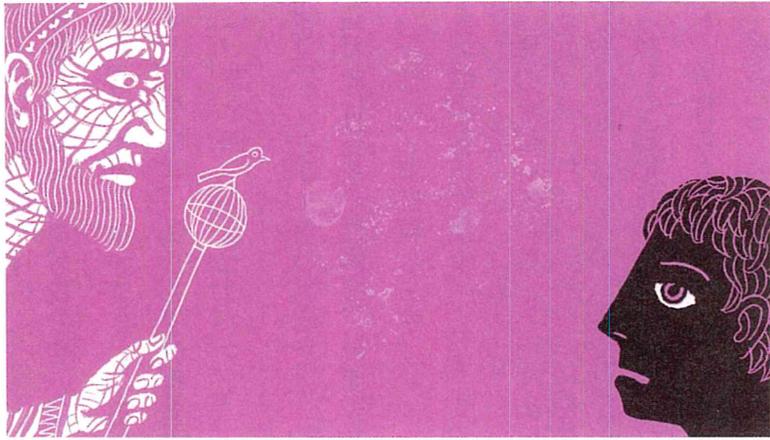
意 律儀

意 祝宴

意 竹馬の友

▼ 拒

文 ……をはばかりる



たちまち彼は、巡邏じゆんらの警吏けいりに捕縛とらされた。調べられて、メロスの懐中かいちゆうからは短剣たんけんが出てきたので、騒さわぎが大きくなつてしまった。メロスは、王の前に引き出された。

「この短剣で何をするつもりであつたか。言え！」暴君ぼうくんディオニスディオニスは静かに、けれども威厳いげんをもつて問いつめた。その王の顔は蒼白そうはくで、眉間みけんのしわは、刻み込まれたように深かつた。

「町を暴君の手から救うのだ。」とメロスは悪びれずに答えた。

「おまえがか？」王は、憫笑びんしょうした。「しかたのないやつじゃ。おまえには、わしの孤独こどくがわからぬ。」

「言うな！」とメロスは、いきりたつて反駁はんぱくした。「人の心を疑うのは、最も恥ちずべき悪徳あくとくだ。王は、民たみの忠誠ちゅうせいをさえ疑つておられる。」

「疑うのが、正当の心がまえなのだ、わしに教えてくれたのは、おまえたちだ。人の心は、あてにならない。人間は、もともと私欲かたまりの塊かたまりさ。信じては、ならぬ。」暴君ぼうくんは落ち着いてつぶやき、ほつとため息をついた。「わしだって、平和を望んでいるのだが。」

「なんのための平和だ。自分の地位を守るためか。」今度はメロスが嘲笑ちやうしやうした。「罪のない人を殺して、何が平和だ。」
「黙れ、下賤げせんの者。」王は、さつと顔を上げて報いた。「口

15

10

5

巡邏

見回り。

警吏

警護の役人。

▼ 眉 吏

憫笑

あわれみ笑う。

▼ (嘲) 嘲

意 眉間

類 嘲笑

意 報いる

では、どんな清らかなことでも言える。わしには、人のほらわたの奥底が見え透いてならぬ。おまえだって、いまに、はりつけになつてから、泣いてわびたつて聞かぬぞ。」

「ああ、王はりこうだ。うぬぼれているがよい。私は、ちゃんと死ぬる覚悟でいるのに。命乞いなど決してしない。ただ、——」と言いかけて、メロスは足もとに視線を落とし瞬時たぬら

い、「ただ、私に情けをかけたつもりなら、処刑までに三日間の日限を与えてください。たつた一人の妹に、亭主をもたせてやりたいのです。三日のうちに、私は村で結婚式を挙げさせ、必ず、ここへ帰ってきます。」

「ばかな。」と暴君は、しわがれた声で低く笑つた。「とんでもないうそを言うわい。逃がした小鳥が帰ってくるというのか。」

「そうです。帰ってくるのです。」メロスは必死で言いはつた。「私は約束を守ります。私を、三日間だけ許してください。妹が、私の帰りを待っているのだ。そんなに私を信じられないならば、よろしい、この町にセリマンティウスという石工がいます。私の無二の友人だ。あれを、人質としてここに置いていこう。私が逃げてしまつて、三日目の日暮れまで、ここに帰つてこなかつたら、あの友人を締め殺してください。頼む。そうしてください。」

それを聞いて王は、残虐な気持ちで、そつとほくそ笑んだ。生意気なことを言うわい。どうせ帰つてこないにきまつている。このうそつきにだまされたふりして、放してやるのもおもしろい。そうして身代わりの男を、三日めに殺してやるのも気味がいい。人は、これだから信じられぬと、わしは悲しい顔して、その身代わりの男を磔刑に処してやるのだ。世の中の、正直

15

10

5

▼ 乞

▼ 刑 亭

磔刑

はりつけの刑。

意 瞬時

意 ためらう

類 日限

意 無二

者とかいうやつばらにうんと見せつけてやりたいものさ。

「願いを、聞いた。その身代わりを呼ぶがよい。三日めには日没までに帰ってこい。遅れたら、その身代わりを、きつと殺すぞ。ちよつと遅れてくるがいい。おまえの罪は、永遠に許してやろうぞ。」

「なに、何をおっしゃる。」

「はは。命が大事だったら、遅れてこい。おまえの心は、わかっているぞ。」

メロスは口惜しく、じだんだ踏んだ。ものも言いたくなくなった。

竹馬の友、セリヌンティウスは、深夜、王城に召された。暴君ディオニスの面前で、よき友とよき友は、二年ぶりて相会うた。メロスは、友に一切の事情を語った。セリヌンティウスは無言でうなずき、メロスをひしと抱きしめた。友と友の間は、それでよかった。セリヌンティウスは、縄打たれた。メロスは、すぐに出発した。初夏、満天の星である。

メロスはその夜、一睡もせず十里の道を急ぎに急いで、村へ到着したのは、明くる日の午前、日はすでに高く昇って、村人たちは野に出て仕事を始めていた。メロスの十六の妹も、今日は兄の代わりに羊群の番をしていた。よろめいて歩いてくる兄の、疲労困憊の姿を見つけて驚いた。そうして、うるさく兄に質問を浴びせた。

「なんでもない。」メロスは無理に笑おうと努めた。「町に用事を残してきた。またすぐ町に行かなければならぬ。明日、おまえの結婚式を挙げる。早いほうがよからう。」

妹は頬を赤らめた。

▼
到

意 文
疲勞困憊
じだんだ踏む

「うれしいか。きれいな衣装も買ってきた。さあ、これから行って、村の人たちに知らせてこい。結婚式は、明日だと。」

メロスは、また、よろよろと歩きだし、家へ帰って神々の祭壇を飾り、祝宴の席を調べ、まもなく床に倒れ伏し、呼吸もせぬくらいの深い眠りに落ちてしまった。

目が覚めたのは夜だった。メロスは起きてすぐ、花婿の家を訪れた。そうして、少し事情があるから、結婚式を明日にしてくれ、と頼んだ。婿の牧人は驚き、それはいけない、こちらにはまだなんの支度もできていない、ぶどうの季節まで待ってくれ、と答えた。メロスは、待つことはできぬ、どうか明日にしてくれたまえ、とさらにおして頼んだ。婿の牧人も頑強であった。なかなか承諾してくれない。夜明けまで議論を続けて、やっと、どうにか婿をなだめ、

すかして、説き伏せた。結婚式は、真昼に行われた。新郎新婦の、神々への宣誓が済んだ頃、黒雲が空を覆い、ぽつりぽつり雨が降りだし、やがて車軸を流すような大雨となった。祝宴に列席していた村人たちは、何か不吉なものを感じたが、それでも、めいめい気持ちを引き立て、狭い家の中で、むんむん蒸し暑いのもこらえ、陽気に歌を歌い、手を打った。メロスも、満面に喜色をたたえ、しばらくは、王とのあの約束をさえ忘れていた。祝宴は、夜に入っていよいよ乱れ華やかになり、人々は、外の豪雨を全く気にしなくなった。メロスは、一生このままここにいたい、と思った。このよい人たちと生涯暮らしていきたいと願ったが、今は、自分の体で、自分のものではない。ままたらぬことである。メロスは、わが身にむち打ち、ついに出発を決意した。明日の日没までには、まだ十分の時がある。ちよつとひと眠りして、それからす

15

10

5

車軸を流す

大雨の形容。車輪の軸のような太い雨が降る、という意味。

▼ 軸
▼ 吉

意 頑強
対 承諾
意 なだめる

ぐに出発しよう、と考えた。その頃には、雨も小降りになっていよう。少しでも長くこの家に
ぐずぐずとどまつていたかった。メロスほどの男にも、やはり未練の情というものはある。今
宵よいぼうぜん呆然、歡喜に酔っているらしい花嫁に近寄り、

「おめでとう。私は疲れてしまったから、ちよつとごめんこうむつて眠りたい。目が覚めたら、
すぐに町に出かける。大切な用事があるのだ。私がいなくても、もうおまえには優しい亭主が
あるのだから、決して寂しいことはない。おまえの兄の、いちばん嫌いなものは、人を疑うこ
とと、それから、うそをつくことだ。おまえも、それは、知っているね。亭主との間に、どん
な秘密でもつくつてはならぬ。おまえに言いたいのは、それだけだ。おまえの兄は、たぶん偉
い男なのだから、おまえもその誇りをもっている。」

花嫁は、夢見心地でうなずいた。メロスは、それから花婿の肩をたたいて、
「支度のないのはお互いさまさ。私の家にも、宝といつては、妹と羊だけだ。ほかには、何も
ない。全部あげよう。もう一つ、メロスの弟になったことを誇つてくれ。」

花婿はもみ手して、てれていた。メロスは笑つて村人たちにも会えしやく釈して、宴席から立ち去
り、羊小屋に潜り込んで、死んだように深く眠つた。

目が覚めたのは明るる日の薄明の頃である。メロスは跳はね起き、南無三なむさん、寝過ねごしたか、い
や、まだまだだじようぶ、これからすぐに出発すれば、約束の刻限までには十分まにあう。
今日はぜひとも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑つてはりつ
けの台に登つてやる。メロスは、悠々ゆうゆうと身支度を始めた。雨も、幾分小降りになつて

15

10

5

▼宵

南無三
失敗したときに発する
語。しまった、の意。仏
教用語の「南無三宝」の
略。

▼悠

意 未練
意 会釈
同 信実
意 幾分

である。身支度はできた。さて、メロスは、ぶるんと両腕を大きく振って、雨中、矢のごとく走り出た。

私は、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。身代わりの友を救うために走るのだ。王の奸佞かんねい邪知を打ち破るために走るのだ。走らなければならぬ。そうして、私は殺される。若い時から名誉めいよを守れ。さらば、ふるさと。若いメロスは、つらかった。幾度か、立ち止まりそうになった。えい、えいと大声あげて自身を叱りながら走った。村を出て、野を横切り、森をくぐり抜け、隣村に着いた頃には、雨もやみ、日は高く昇って、そろそろ暑くなってきた。メロスは額の汗を拳こぶしで払い、ここまで来ればだいじょうぶ、もはや故郷への未練はない。妹たちは、きっとよい夫婦になるだろう。私には、今、なんの気もかりもないはずだ。まっすぐに王城に行き着けば、それでよいのだ。そんなに急ぐ必要もない。ゆっくり歩こう、と持ちまえののんきさを取り返し、好きな小歌をいい声で歌いだした。ぶらぶら歩いて二里行き三里行き、そろそろ全里程の半ばに到達した頃、降ってわいた災難、メロスの足は、はたと、止まった。見よ、

前方の川を。昨日の豪雨で山の水源地は氾濫し、濁流だくりゅうとうとうと下流に集まり、猛勢一挙に橋を破壊し、どうどうと響きをあげる激流が、こつぱみじんに橋げたを跳ね飛ばしていた。彼は茫然ぼうぜんと、立ちすくんだ。あちこちと眺め回し、また、声を限りに呼びたててみたが、繫舟けいしゅうは残らず波にさらわれて影なく、渡し守むりの姿も見えない。流れはいよいよ、膨れ上がり、海のようになっている。メロスは川岸にうずくまり、男泣きに泣きながらゼウスに手を挙げて哀願あいがんした。「ああ、鎮しずめたまえ、荒れ狂くるう流れを！ 時は刻々に過ぎていきます。太陽もすでに真

15

10

5

奸佞邪知

心がねじけて悪知恵のあること。

▼ 誉

▼ 拳

▼ 濁

繫舟
岸につなぎ留めた小舟こぶね。

▼ 舟

ゼウス

ギリシア神話の最高神。
ローマ神話ではジュピターという。

▼ 哀

意 持ちまえ

意 うずくまる

昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことができなかつたら、あのよい友達達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑うごとく、ますます激しく躍り狂う。波は波をのみ、巻き、あおり立て、そうして時は、刻一刻と消えていく。今はメロスも覚悟した。泳ぎきるよりほかにない。ああ、神々も照覧あれ！ 濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、今こそ發揮してみせる。メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのたうち荒れ狂う波を相手に、必死の闘争を開始した。満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきとかき分けかき分け、獅子奮迅の人の子の姿には、神もあわれと思つたか、ついに憐愍を垂れてくれた。押し流されつつも、みごと、対岸の樹木の幹に、すがりつくことができたのである。ありがたい。メロスは馬のように大きな胸震い一つして、すぐにまた先を急いだ。一刻といえども、無駄にはできない。日はすでに西に傾きかけている。ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠を登り、登りきって、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は日の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ち物全部を置いていけ。」

「私には命のほかには何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、命が欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

15

10

5

獅子奮迅

獅子のように暴れ回るさま。

▼ 駄

▼ 賊

意 誠

意 満身

意 すがりつく

文 ……といえども

意 躍り出る

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り上げた。メロスはひよいと、体を折り曲げ、飛

鳥のごとく身近の一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、「気の毒だが正義のためだ！」と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さっさと走って峠を下った。

一気に峠を駆け降りたが、さすがに疲労し、おりから午後の灼熱の太陽がまともに、かつと照ってきて、メロスは幾度となくめまいを感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろ

よろ二、三步歩いて、ついに、がくりと膝を折った。立ち上がることができぬのだ。天を仰いで、悔し泣きに泣きだした。ああ、あ、濁流を泳ぎきり、山賊を三人も打ち倒し韋駄天、ここ

まで突破してきたメロスよ。真の勇者、メロスよ。今、ここで、疲れきって動けなくなるとは情けない。愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。おまえは、

希代の不信の人間、まさしく王の思うつぼだぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身萎えて、もはや芋虫ほども前進かなわぬ。路傍の草原にごろりと寝転がった。身体疲労すれば、精神も

ともにやられる。もう、どうでもいいという、勇者に不似合いなふてくされた根性が、心の隅に巣くった。私は、これほど努力したのだ。約束を破る心は、みじんもなかった。神も照覧、

私は精いっぱいに努めてきたのだ。動けなくなるまで走ってきたのだ。私は不信の徒ではない。ああ、できることなら私の胸を断ち割って、真紅の心臓をお目にかきたい。愛と信実の血液だ

けで動いているこの心臓を見せてやりたい。けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。私は、よくよく不幸な男だ。私は、きつと笑われる。私の一家も笑われる。私は友を

欺いた。中途で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ。ああ、もう、どうでもいい。

15

10

5

▼ 殴

韋駄天

仏法の守護神。足が速いということから、速く走る者をたとえていう。

▼ 傍

▼ 萎

▼ 欺

意 ひるむ

文 さすがに

意 勇者

類 萎える

意 路傍

意 真紅

意 欺く

これが、私の定まった運命なのかもしれない。セリヌンティウスよ、許してくれ。君は、いつでも私を信じた。私も君を、欺かなかった。私たちは、本当によい友と友であったのだ。一度だって、暗い疑惑ぎわくの雲を、お互い胸に宿したことはなかった。今だって、君は私を無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがとう、セリヌンティウス。よくも私を信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友の間の信実しんじつは、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。セリヌンティウス、私は走ったのだ。君を欺くつもりは、みじんもなかった。信じてくれ！ 私は急ぎに急いでここまで来たのだ。濁流を突破した。山賊の囲みからも、するりと抜けて一気に峠を駆け降りてきたのだ。私だから、できたのだよ。ああ、このうえ、私に望みたまうな。放っておいてくれ。どうでも、いいのだ。私は負けたのだ。だらしが無い。笑ってくれ。王は私に、ちょっと遅れてこい、と耳打ちした。遅れたら、身代わりを殺して、私を助けてくれると約束した。私は王の卑劣ひれつを憎んだ。けれども、今になってみると、私は王の言うままになっている。私は、遅れていくだろう。王は、独り合点がてんして私を笑い、そうしてこともなく私を放免するだろう。そうになったら、私は、死ぬよりつらい。私は、永遠に裏切り者だ。地上で最も、不名誉の人種だ。セリヌンティウスよ、私も死ぬぞ。君と一緒に死なせてくれ。君だけは私を信じてくれるにちがいない。いや、それも私の、独りよがりか？ ああ、もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村には私の家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさか私を村から追い出すようなことはしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。ああ、な

15

10

5

▼
惑

▼
卑

意 無心
卑劣

にもかも、ばかばかしい。私は、醜^{みにく}い裏切り者だ。どうとも、勝手にするがよい。やんぬるかな。——四肢を投げ出して、うとうと、まどろんでしまった。

ふと耳に、潺^{せんせん}々、水の流れる音が聞こえた。そつと頭をもたげ、息をのんで耳を澄ました。

すぐ足もとで、水が流れているらしい。よろよろ起き上がって、見ると、岩の裂け目から滾^{こんこん}々と、何か小さくささやきながら清水が湧き出ているのである。その泉に吸い込まれるようにメ

ロスは身をかがめた。水を両手ですくって、一口飲んだ。ほうと長いため息が出て、夢から覚

めたような気がした。歩ける。行こう。肉体の疲労回復とともに、僅かながら希望が生まれた。

義務遂行^{すいこう}の希望である。わが身を殺して、名誉を守る希望である。斜陽は赤い光を、木々の葉

に投じ、葉も枝も燃えるばかりに輝^{かがや}いている。日没までには、まだ間がある。私を、待ってい

る人があるのだ。少しも疑わず、静かに期待してくれている人があるのだ。私は、信じられて

いる。私の命などは、問題ではない。死んでおわび、などと気のいいことは言っておられぬ。

私は、信頼に報いなければならぬ。今はただその一事だ。走れ！メロス。

私は信頼されている。私は信頼されている。先刻の、あの悪魔のささやきは、あれは夢だ。

悪い夢だ。忘れてしまえ。五臓が疲れているときは、ふいとあんな悪い夢を見るものだ。メロ

ス、おまえの恥ではない。やはり、おまえは真の勇者だ。再び立って走れるようになったでは

ないか。ありがたい！私は、正義の士として死ぬことができるぞ。ああ、日が沈む。ずんず

ん沈む。待ってくれ、ゼウスよ。私は生まれた時から正直な男であった。正直な男のままにし

て死なせてください。

▼醜

やんぬるかな
もうおしまいだ。

潺々

浅い水がさらさらとよ
どみなく流れるさま。ま

た、その音。

滾々

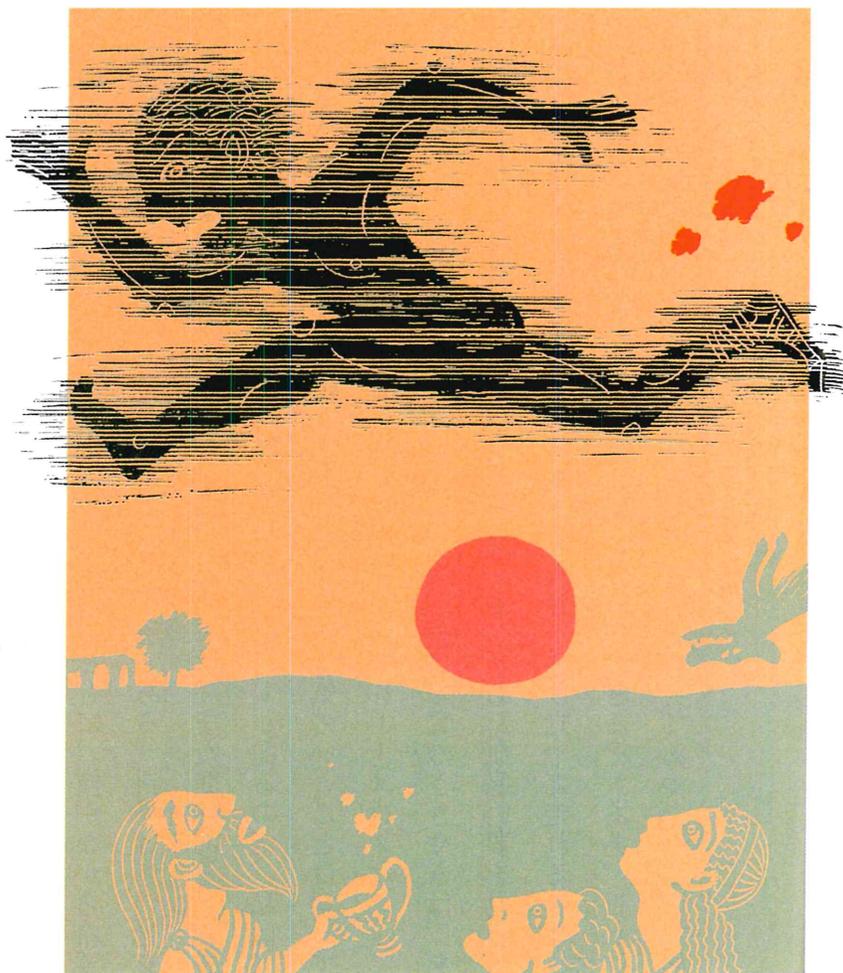
水が湧き、流れるさま。

▼遂

▼輝

- 意 まどろむ
- 意 ささやく
- 意 遂行
- 意 斜陽

道行く人を押ししのけ、跳ね飛ばし、メロス
は黒い風のように走った。野原で酒宴の、その宴
席のまただ中を駆け抜け、酒宴の人たちを仰天させ、
犬を蹴飛ばし、小川を跳び越え、少し
ずつ沈んでゆく太陽の、十倍も速く走った。一団の旅人
ときっとすれ違った瞬間、不吉な会話を小耳にはさんだ。
「今頃は、あの男も、はりつけにかかっているよ。」
ああ、その男、その男



意
仰天

のために私は、今こんなに走っているのだ。その男を死なせてはならない。急げ、メロス。遅れてはならぬ。愛と誠の力を、今こそ知らせてやるがよい。風体ふうていなんかは、どうでもいい。メロスは、今は、ほとんど全裸ぜんらた体であった。呼吸いそもできず、二度、三度、口から血が噴き出た。見える。はるか向こうに小さく、シラクスの町の塔楼とうろうが見える。塔楼は、夕日を受けてきらきら光っている。

「ああ、メロス様。」うめくような声が、風とともに聞こえた。

「誰だ。」メロスは走りながら尋ねた。

「フィロストラトスでございます。あなたのお友達セリヌンティウス様の弟子でございます。」その若い石工も、メロスのあとについて走りながら叫んだ。「もう、だめでございます。無駄でございます。走るの、やめてください。もう、あのかたをお助けになることはできません。」

「いや、まだ日は沈まぬ。」

「ちょうど今、あのかたが死刑になるところです。ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。ほんの少し、もうちょっとでも、早かったなら！」

「いや、まだ日は沈まぬ。」メロスは胸の張りさける思いで、赤く大きい夕日ばかりを見つめていた。走るよりほかはない。

「やめてください。走るの、やめてください。今はご自分のお命が大事です。あのかたは、あなたを信じておりました。刑場に引き出されても、平気でいました。王様が、さんざんあのかたをからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念をもち続けている様子でございます

15

10

5

▼ 楼 裸

意 風体

ました。」

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。まにあう、まにあわぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついてこい！ フィロストラトス。」

「ああ、あなたは気が狂ったか。それでは、うんと走るがいい。ひよつとしたら、まにあわぬものでもない。走るがいい。」

言うにや及ぶ。まだ日は沈まぬ。最後の死力を尽くして、メロスは走った。メロスの頭は、空っぽだ。何ひとつ考えていない。ただ、訳のわからぬ大きな力に引きずられて走った。日は、ゆらゆら地平線に没し、まさに最後の一片の残光も、消えようとした時、メロスは疾風のごとく刑場に突入した。まにあつた。

「待て。その人を殺してはならぬ。メロスが帰ってきた。約束のとおり、今、帰ってきた。」と、大声で刑場の群衆に向かって叫んだつもりであったが、喉が潰れてしわがれた声がかすかに出たばかり、群衆は、一人として彼の到着に気がつかない。すではりつけの柱が高々と立てられ、縄を打たれたセリヌンティウスは、徐々に^{じょじょ}つり上げられてゆく。メロスはそれを目撃して最後の勇、先刻、濁流を泳いだように群衆をかき分け、かき分け、

「私だ、刑吏！ 殺されるのは、私だ。メロスだ。彼を人質にした私は、ここにいる！」と、かすれた声で精いっぱい叫びながら、ついにはりつけ台に登り、つり上げられてゆく友の両足に、かじりついた。群衆は、どよめいた。あっぱれ。許せ、と口々にわめいた。セリヌン

15

10

5

言うにや及ぶ

言う必要はない。

刑吏

刑を執行する役人。

意 残光

意 群衆

意 わめく

ティウスの縄は、ほどかれたのである。

「セリヌンティウス。」メロスは目に涙を浮かべて言った。

「私を殴れ。力いっぱい頬を殴れ。私は、途中で一度、悪い夢を見た。君がもし私を殴ってくれなかったら、私は君と抱擁する資格さえもないのだ。殴れ。」

セリヌンティウスは、全てを察した様子でうなずき、刑場いっぱい鳴り響くほど音高くメロスの右頬を殴った。殴ってから優しくほほえみ、

「メロス、私を殴れ。同じくらい音高く私の頬を殴れ。私はこの三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて、初めて君を疑った。君が私を殴ってくれなければ、私は君と抱擁できない。」

メロスは腕にうなりをつけてセリヌンティウスの頬を殴った。

「ありがとう、友よ。」二人同時に言い、ひしと抱き合い、それからうれし泣きにおいおい声を放って泣いた。

群衆の中からも、歔歔の音が聞こえた。暴君ディオニスは、群衆の背後から二人のさまを、



10

5

▼
擁

■ 意
察する
歔歔
すすり泣き。



太宰治「一九〇九—一九四八」

青森県に生まれた。小説家。

作品に『富嶽百景』『津軽』『お伽草紙』『斜陽』『人間失格』などがある。

《出典》『太宰治全集 第三卷』によった。

まじまじと見つめていたが、やがて静かに二人に近づき、顔を赤らめて、こう言った。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしをも仲間に入れてくれまいか。どうか、わしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

どっと群衆の間に、歓声が起こった。

「ばんざい、王様ばんざい。」

一人の少女が、緋のマントをメロスにささげた。メロスは、まごついた。よき友は、気をきかせて教えてやった。

「メロス、君は、真つ裸じゃないか。早くそのマントを着るがいい。このかわいい娘さんは、メロスの裸体を、皆に見られるのが、たまらなく口惜しいのだ。」

勇者は、ひどく赤面した。

(古伝説と、シルレルの詩から。)

意
空虚

▼
虚

千 みちしるべ

内容を捉えよう

① 「メロス」「ディオニス」「セリヌンティウス」は、それぞれどのような人物か、まとめよう。

学び 読み深めよう

② 「走れ！メロス。」(P 261 L 12) と命令形で語られているのはなぜか、考えよう。

③ 「私は、途中で一度、悪い夢を見た。」(P 265 L 3) とは、どのようなことをさしているのか、考えよう。

参考 「悪い夢」という言葉はほかにも出てくるので、その箇所との関連を考えてみよう。

自分の考えを伝え合おう

④ メロスが刑場に向かって走るこの意味について、次の二つの表現を比較しながら考えを交流しよう。

- (1) 「私は、なんだか、もつと恐ろしく大きいものために走っているのだ。」(P 264 L 3~4)

(2) 「ただ、訳のわからぬ大きな力に引きずられて走った。」(P 264 L 8)

学び ⑤ 語り手によるメロスの呼び方が、「メロス」↓「私」

↓「メロス」と変化することを踏まえ、このような語り方がもたらす効果について話し合い、意見を交流しよう。

参考 秋元さん 初めのうちは「メロス」だけれど、途中から「私」になったり「メロス」になったり何度も交替しているね。

高橋さん どちらか一方にできなかったのかな。
宮原さん 「メロス」で語ったほうがよいこと、「私」で語ったほうがよいことって、どんなことだろう。

言葉・情報

言葉と表現

この作品には特徴的な表現が多く用いられている。次の観点に該当する表現を本文から探し、それぞれどのような効果をあげているか考え、自分の表現に役立てよう。

- (1) 擬声語・擬態語 (2) 比喻表現
(3) 漢語表現 (4) 繰り返し表現



振り返り

- 漢語など、この作品の特徴的な表現の効果を考え、自分の表現に役立てているか。
- 語り手に留意して、「メロス」「ディオニス」「セリヌンティウス」の見方や考え方について理解しているか。
- これまでに学習した作品と語り方を比較して、気づいたことを交流しよう。

この教材で学ぶ漢字

252 嘲 チヨウ あざける 嘲り	252 眉 メイ まゆ 眉毛 眉間	252 吏 リ 官吏	251 拒 キョ こぼむ 拒まれる 拒絶	250 宴 エン 宴会	250 婿 ムコ 婿養子	250 敏 ビン 機敏	250 邪 ジャ 邪心
256 悠 ユウ 悠久	256 宵 ヨイ 春の宵	255 吉 キチ 大吉 吉凶	255 軸 シク 軸足	254 到 トウ 到達	253 亭 テイ 料亭	253 刑 ケイ 刑事	253 乞 キョウ 乞う 御期待
259 殴 ナグ 殴り合う	258 賊 ソク 賊軍	258 駄 ダ 駄賃	257 哀 アイ あわれ 悲哀 死を哀れむ	257 舟 フネ ふね 小舟 舟遊び	257 濁 ダク シユウ にこる 濁り水 濁点	257 拳 ケン こぶし 握り拳 拳法	257 誉 ヨ ほまれ 誉れ高い 榮譽

新出音訓

258 誠★ (まこと)	257 渡し守★ (もり)	255 蒸し暑い★ (むす)	255 調える★ (ととの)	252 民★ (たみ)	250 衣装★ (シヨウ)
252 私欲	252 忠誠	252 威厳	252 警吏	251 皇后	251 若い衆
259 心臓	258 發揮	257 水源	257 故郷	255 宣誓	253 処刑
		264 訳	261 泉	260 延びる	260 生き

●小学六年生の漢字

260 惑 ワク まどよう 惑わせる	259 欺 ギ あざむく 人を欺く	259 傍 ボウ 傍観	259 萎 イ なえる 萎縮 草が萎える
261 輝 キ かがやく 輝かしい光	261 遂 スイ とげる やり遂げる	261 醜 シユウ みにくい 醜い行い	260 卑 ヒ 卑近
266 虚 キョ 虚構	265 擁 ヨウ 擁護	263 楼 ロウ 楼閣	263 裸 ラ はだか 裸身 裸電球